

pūjā : インドの言葉と習俗

パウル・ティーメ
加治洋一・吉田孝夫共訳

pūjā という言葉を解明することによって、言語学的のみならず宗教史的にも重要なひとつの問題が解決されることが約束されている。この言葉は、今日のヒンドゥー語における宗教的語彙のなかで、神性を、とりわけその像や象徴物を崇拜する営み、そして供犠を伴う多かれ少なかれ複合化された崇拜を表わす名称として用いられている。つまりこれは祭儀の中心的概念を表示する言葉なのである。ところで、礼拝の一形式であるこの崇敬を、ヴェーダの荘重な yajña [讃歌を伴う祭式] に源を持つものであると簡単に考えるわけにはいかない。いくつかの原始的な、あるいは少なくとも民族的な特性を備えていることが多いからである。St. Konow の見解によれば、これは yajña とは異なり、「太古の礎に (auf uralter Grundlage)」基づくものである (『ヘルマン・ヤコービ記念論集』 *Festgabe Hermann Jacobi* p. 263)。とはいえ、その礎について本当に確かなことを、そして yajña と pūjā との関係について本当に結論的な事柄を述べることは、pūjā という言葉の本来的、原初の含意、そしてこの言葉のもとに名づけられた祭儀行為の根本的な意味が、疑問の余地なく確認されないかぎり不可能である。

このような状況で、しばしば最初の手がかりを得る手段となるのが語源の考察である。しかし、蓋然性の高い、また説得力のある言語的關係を見出すことは、ほかでもないこの言葉においては、まさに容易なことではない。J・シャルパンティエの「pūjā の概念と語源について (Über den Begriff und die Etymologie von *pūjā*)」(『ヘルマン・ヤコービ記念論集』 p. 276ff.) における詳細な考証でさえも、満足のゆく結果にはたどりつかなかった。しかもその第一の理

由は、たどりうる最古の伝承においてこの言葉がもつ意味を、解釈学的手続きのもとに検証し、それによって得られる成果を確かな礎として言語的解釈へと突き進むこと、それを彼が怠ったからである。語史的問題を扱う場合には、古いテキストのもつ生き生きとした言語活動の姿に、まずはイメージを働かせることが必要である。しかし、彼の研究はそれを必要とみなさず、膨大な量の学識と想像力とを実りなく浪費してしまう好個の例となっているように思われる——もちろんそれは、今問題にしている当面の問いに関する限りにおいてではあるが。

シャルパンティエは、すでに以前から表明されていた推測、つまり *pūjā* とはドラヴィダ語からの借用語であるという説を支持しており、タミル語とカナラ語に登場する *pūṣu* または *pūsu* (塗りつける, 貼りつける, 上塗りする) に由来すると考える。したがって、*pūjā* とはまず「色を塗ること」であり、続いて、それが神像崇拜の特徴的な点であるところから「神がみへの崇拜, 礼拝」となり、そして最終的に「崇敬」の意味をもつに至ったと彼は考える。確かに、多くの場合、神的象徴を赤で彩色することによって崇拜することは、かなりの信憑性をもって、原始的宗教観念から導くことができる。それ故、*pūjā* という語と概念とを、原住民の言語と思考からアーリア人が借用したと考えることにも同時に内的な蓋然性が生まれる。

しかし、たとえ明言されていない（これは重要な点である）とはいえ、シャルパンティエが前提とした *pūjā* という語の意味の展開の歴史は、さしあたりどれほど納得のゆくものに思われるとしても、実はまったくの思弁に基づくものである。実際、最古の資料における用法と一致させることは不可能なのである。*pūjā* に帰せられるいくつかの意味の中で、最初のものとして「敬意の表明, 尊敬すること」を *PW.* が挙げているのには十分な根拠がある。それに対して「礼拝」という意味が二次的なものにすぎないことは容易に見て取れる。シャルパンティエの信ずるところでは、「*Yāska* や *Pāṇini* が、 $\sqrt{pūj}$ や *pūjā* という語を確かに同じ意味で使っているが、これらの語の元来の意味を（シャルパンティエ自身は今日の *pūjā* の概念から推測したのだが）推定することは

もはや不可能であるという事態」は等閑視してさしつかえないと言う。そしてこの事態を彼は、さらにある宗教史上の帰結のために利用しさえする (ibid. p. 292)。この論述箇所は、まさに彼の論証の構築物が砂上の楼閣であることをはっきり示していると私には思われる。

もちろん、われわれの探求において、現代の pūjā から考察を出発させることはなんら損失ではない。ただし、「pūjā の最古の根本的要素として何を考えるべきなのか」という問いだけは、明らかに、主観的憶測に傾くシャルパンティエがたどったのとは別の道をとおって解かれる必要がある。つまり「当座は見合わせてかまわないもの」と「特徴的要素として現われているもの」との区別は、私的感慨による判断に委ねられてはならない。そうではなく、いにしへの陳述の光のなかで——数千年をさかのぼる伝承を評価できるという恵まれた状況にわれわれはあるのだから——援用しうるあらゆる手段を用いつつ、明確な方法のもとに確定されなければならないのである。

今日行われている「大規模な」pūjā の構成要素として、J・A・デュボワ師 (*Hindu Manners*, p. 149f.) は次のものを挙げている。1. Avahana. 神性の召喚。2. Asana. 坐るべき席が整えられる。3. Swagata. 安全に到着したかどうか、途上事故がなかったかどうかを尋ねられる。4. Padya. 洗足用の水が提供される。5. Arghya. 花・サフラン・白檀末の加えられた水が供与される。6. Achamana. 規定通りの作法で、口を漱ぎ、顔を洗うための水が提供される。7. Madhuparka. 金属製の容器で、蜂蜜と砂糖とミルクからなる飲料が提供される。8. Snanajala. 沐浴用の水。9. Bhooshan-abharanasya. 衣服・宝石・装身具が提供される。10. Gandha. 白檀末。11. Akshatas. サフランで着色された米粉。12. Pushpa. 花。13. Dhūpa. 香。14. Dīpa. 灯明。15. Neiveddya. 最後の供物は、調理された米、果物、溶けたバター、砂糖、その他の食べ物、そしてキンマ [コシヨウ科のつる草。乾燥した葉を健胃・去痰剤として用いる] である。——これらの供養が行われる前に、指先で少量の水が振りかけられる。次いで礼拝者は、彼等の前に額づく。

これらがすべて古来の習俗に基づいて行われていることは、例えば [Rām.1.2.25] に示されている。pūjayām āsa taṃ devaṃ pādya-(4)-arghya-(5)-āsana-(2)-vandanaiḥ, praṇamya vidhivac cainaṃ prṣṭvā caiva nirāmayam (3); 1. 14. 27 ācchādītās te vāsobhiḥ (9) puṣpair (12) gandhaiś (10) ca pūjitāḥ, Kauṭ adhik. 14, adhy. 3, Satz 56 (ed. Jolly p. 261, l. 21f.) ...gandha-(10)-mālyena (9) pūjayitvā...

こうした習俗の意味についても疑問の余地はない。[Rām.1.2.25] では、pādya その他が礼讃 (vandana) として総括されている。√pūjではなく、√arc (崇める) が用いられている例：[Rām.1.31.13] arcitaṃ vividhair gandhair (10) dhūpaiś (13) cāgurugandhibhiḥ. あるいは、pūjā が arc の手段である場合：[Rām.3.16.6] navāgrayaṇa-(15)-pūjābhir abhyarcya pitṛdevatāḥ.

ここから、さらに一步進むことができるだろう。デュボワの pūjā に関する論述はその正当性を与えてくれる。偏見なく考えれば、次のことは看過しようのない事実である。つまりこの祭儀行為の様々な部分は、ひとつの共通する思想のもとに基礎づけられることによって意義深い統一体にまとめられている。そしてそれ故に、その統一体から個々の要素を取り出すことが容易なことではなくなっている。すなわちデュボワが描出した形式における pūjā とは、饗応さるべき客人という特性をもつ神に対して捧げられる崇敬なのである。

この考え方の由来が、—— [Rām.1.2.25] の上記参照箇所からでないとしても——、√pūj の古い用法にあることは、望みうる最高の明証性を備えている。[Kauṭ.1.3.11(5.12)] では、saṃnyāsin [婆羅門の第四住期] の義務として、devatāpitratithipūjā (神がみ、祖霊、客人への崇敬) が挙げられている。アヨーディヤー (Ayodhyā) の住人は、[Rām.1.6.17] では、devatātithipūjaka として褒め称えられ、したがって [Rām.2.28.14] にいう devatānām pitṛṇām ca kartavyaṃ vidhipūrvakam, prāptānām atithīnām ca rityaśaḥ pratipūjanam の原理に従っている。つまり神がみと祖霊にならんで、pūjā の名で言われる崇敬が示されるべき対象は客人なのである。だからこそ客人は、pūjanīya または pūjanārha となる。[Rām.1.52.14] rājaṃ tvam atithīśreṣṭhaḥ pūjanīyaḥ

prayatnataḥ, 1.73.6f. atha rājā Daśarathaḥ priyātithim upasthitam, dr̥ṣṭvā paramasatkāraiḥ pūjanārham apūjayat, [3.12.30] pūjanīyaś ca mānyaś ca bhavān prāptaḥ priyātithiḥ.

その一方で、 $\sqrt{pūj}$ ではなく \sqrt{arc} が用いられることもままある。[Rām. 2.48.11] priyātithim iva prāptaṃ nainaṃ śakṣyanty anarcitum (cf. オデュッセイア § 56f. ξείν', οὐ μοι θέμις ἔσθ', οὐδ' εἰ κακίων σέθεν ἔλθοι, ξείνον ἀτιμῆσαι)

また一方では、デュボワが pūjā の個々の構成要素として挙げており、客人に示される pūjā をより具体的に特徴づけるいくつかのキーワードがある。その幾つかにおいてこれは自明のことである。pādyā その他の語は、その性質からして、到着する客人に差し出される事物のことを言う。その他の個々の場合においても合致することを明示するために、以下の箇所を挙げておきたい。

[Rām. 1.47.21] pūjāṃ ca paramāṃ kṛtvā sopādhyāyaḥ sabāndhavaḥ, prāñjaliḥ kuśalaṃ pṛṣtvā (3) Viśvāmītram athābravīt, [1.10.17] gatānāṃ tu tataḥ pūjāṃ ṛṣiputraś cakāra ha : idam arghyam (5) idam pādyam (4) idam mūlam phalam ca (15) naḥ, [1.52.3,4] upaviṣṭāya (2) ca tadā Viśvāmītrāya dhīmate, yathānyāyāṃ munivaraḥ phalamūlam (15) upāharat. pratigrhya tu tāṃ pūjāṃ ..., [1.52.16f.] phalamūlena (15) bhagavan vidyate yat tavāśrame, pādyena-(4)-ācamanīyena (6) bhagavaddarśanena ca, sarvathā ca mahāprājña pūjārheṇa supūjitāḥ, [2.1.46f.] samānināya ..., tān veśma nānābharaṇair (9) yathārham pratipūjitān, [2.32.4ff.] tam āgataṃ vedavidam prāñjaliḥ ... abhicakrāma Rāghavaḥ ..., jātārūpamayair mukhyair āngadaiḥ kuṇḍalaiḥ śubhaiḥ, sahemasūtrair mañibhiḥ keyūrain valayair api, anyaiś ca ratnair bahubhiḥ (9) Kākutsthaḥ pratyapūjayat, [3.12.31] evam uktvā phalair mūlaiḥ (15) puṣpaiś (12) cānyaiś ca Rāghavam, pūjayitvā ...(cf. [3.1.22]), [3.31.37] taṃ svayaṃ pūjayitvā tu āsanena-(2)-udakena (4, 5, 6 or 8) ca, [3.35.40] sa svayaṃ pūjayitvā ca bhojanena-(15)-udakena (4, 5, 6 or 8) ca.

最後に挙げた詩句などは、シャルパンティエの態度がいかに恣意的であるかを明白に示してくれるだろう。「まさにこのこと（食事をさしだすこと）が、

pūjā の元来の意味として内在するなどという考えをわれわれに強いるものは何一つない」(同, p. 256)と彼は主張し、そのうえあたかも否定的証拠を見つけたかのように振る舞うからである。

それでは、シャルパンティエが同じ箇所で言う「すべての pūjā の特徴的要素として現われる」もの、つまり「水ないし蜂蜜、発酵乳、糖液などを用いて…神を洗うこと、そして、たいいていの場合、人目を惹く赤や黄色をした、ある種の軟膏や粉、オイル状の物質を用いて塗布ないしすり込むこと」はどうなるのだろうか。明らかに、洗うこと(沐浴すること)などの類は、高貴な客人が到着した際に通常行われていた習俗から導くことができる。その客人に(沐浴後に)オイルと軟膏を塗りこむよう渡すという説は、ともあれ受け入れることができるであろう。この習慣が古代から存在したことに対する疑念を完全に払拭するために、一例として、[AV.9.6.11] yad āñjanābhyañjanaṃ āharaty ājyam eva tat (彼が[客人に]オイルと軟膏をもってきたなら、それは供犠用バターである)を指摘しておこう。オイルの塗布は、真新しい衣服と装飾品の提供と同じく、沐浴の行為の一部であった(デュボワ, p. 9)。しかしまた、顔料を塗ったりすり込んだりすることは、この装飾の構成要素でもあったはずである。

なぜなら、Sītā はその宮廷生活において、aṅgarāga (赤の身体用顔料)と raktacandana (赤の栴檀膏)を常用していたからである。[Rām.2.33.9] aṅgarāgocitām Sītām raktacandanasevinīm. 同様の例は [Rām.2.42.15] yaḥ sukhenopadhāneṣu śete candanarūṣitaḥ. また例えば以下の例も参照のこと。

[Rām.2.78.5f.] ...kubjā sarvābharaṇabhūṣitā, liptā candanasāreṇa rājavastrāṇi bibhratī, [2.82.2] vastrānrāgaprabhayā dyotitā sā sabhottamā, [3.38.27] divyacandanadigdhāṅgān divyābharaṇabhūṣitān.

今の文脈で特に注目し値するのは、Bharadvāja の宴で豪勢に歓待される Bharata の兵士たちが、「赤栴檀膏に赤く染まって」輝いているという記述である。[Rām.2.91.58] raktacandanarūṣitaḥ.

ある種の機会に、まさに赤またはその他の輝く色が、その厄除け効果のため

に（これに関してはツァハリアエ，WZKM 17, p. 214 を参照）装飾として好まれたかどうかという問題は、それゆえ、pūjā における赤い粉と軟膏の使用とはそもそも全く関係がないのである。元来、ここで重要なのは、高貴な客人を崇敬する装飾そのものである。ある種の祭儀において、赤い色を他の目的に、例えば血の代用として使用したのかどうか、そして、後にそれもまた pūjā の概念のもとに包含されていったのかどうか、あるいはまた、本来の pūjā のなかへ原始的な観念と慣習が投影されていったのかどうか——これらの問いは、それ自体が極めて高い関心を惹くものである。それらに満足のいく最終的な解答を与えるためには、根本的かつ綿密な研究が必要であるが、それは今日のインドの宗教に通暁する人びとにゆだねなければならない。

いずれにしても、pūjā の語根と、太古の慣習とはなんら関わりをもたない。しかし、おそらくは、すでに古い時代から、膨大な経費をかけて祭司のみによって執り行われていた荘重な火の供犠よりもずっと大衆向けのものであったであろう。とりわけ、宗教的精神世界の下層に属する神性を讃えるのにふさわしいものであった。ドラヴィダ族の影響を直ちに考える必要はない。特殊な神がみに対する崇敬、亡霊や悪霊への信仰、魔術の観念などが、アーリア人のあいだでも一般的であったことは確実である。日常生活のなかで、それは以前から疑いもなく重要な役割を担っていたのである。これに関しては R. ピシエル、GGA 1894, p. 419 と p. 423 以下を参照のこと。

[RV.6.75] 一補遺された歌である一は、武器の礼賛に捧げられている。その15行目では、明らかにこう言われる：idam ... iṣvai devyai bṛhan namaḥ（ここに神の矢への高い崇敬がある）。[AV.1.19.2] では、daivīr manuṣyeṣavo（神の力を持つ人間の矢）という言葉で矢が荘重に呼びかけられる。[AV.5.20, 5.21] と [6.126] では、戦の太鼓が歌われる。そして [5.21.3] では、その太鼓に溶けたバターが垂らされる（ājyenābhighāritaḥ）とある。[AV.6.13.1] では、神がみと王たちと農場主の武器に対して崇敬が捧げられる（namo devavadhebhyaḥ namo rājavadhebhyaḥ, atho ye viśyānām vadhās

tebhyaḥ ...)。[RV.6.47.26-28] においては、戦車が称揚され、呼びかけられる。それを供物で崇敬するのである ([V.27] haviṣā ratham yaja, [V.28] deva ratha prati havyā gṛbhāya)。

武器を「神的」なものとして崇敬することが、究極的には、原初の「呪物崇拜的」観念に源をもつことは明らかである。しかし同時に、それが高次の神がみへの奉仕に由来する形式をとって執行されることも見逃せない。namas, ājya, havis, yaj は、そもそも原初の祭儀慣習と、つまり迷信的な共感魔術とは何ら関係のない概念であることを示している。要するに、魔術的实践が多少なりとも曖昧になって、高次の祭式のなかに侵入するだけでなく、逆にまた、高次の祭式の要素が沈下したり、古来の呪物が「天上」の位へと高められうる、ということなのである。

ラーマヤナで、諸王から pūjā を受ける弓のことが述べられるとき、([1.67.6] idaṃ dhanuḥ ... pūjitaṃ sarvarājabhiḥ (cf. [1.67.8])), あるいは、全世界から「崇敬」される天上の二張りの弓のことが言われるとき ([1.75.11] ime dve dhanuṣī śreṣṭhe divye lokābhipūjite), ここでわれわれは類似の現象に対峙しているのではないかという強い疑念が浮かんでくる。それは無条件に肯定せねばならないだろう。[Rām. 1.31.12f.] tad ... dhanuḥ ... āyāgabhūtaṃ nṛpates tasya veśmani Rāghava, arcitaṃ vividhair gandhair dhūpais cāgurugandhibhiḥ (この王の館で、供犠の対象となり、幾多の [花] 香料や、沈香の香りのする香煙によって讃えられる、この弓よ) の箇所において明らかに分かるのは、それは元来、客人として饗応された天の住人に与えられる崇敬の形式であって、粗野な魔術などではないということである。

祭司の道具類は、兵士の武器よりも独立した崇拜の対象となりやすい。とりわけ、太古より神の役割を演じてきた犠牲柱 (yūpa) がそれである。[RV.3.8] の詩人は、そのために独自の頌歌を捧げている。彼によって、犠牲柱は「天上のもの」と呼ばれる ([V.6] devāsaḥ)。犠牲柱は「神」の蜂蜜を塗られる ([V.1] añjanti tvām ... vanaspate madhunā daivyena)。そして祭祀用の匙が与えられる ([V.7] yatasrucaḥ)。若く、美しく飾られ、[聖紐を] 巻かれてち

らへやってくる ([V.4] *yuvā suvāsāḥ parivīta āgāt*)。ここでもまた、高度な祭式の崇敬形式が借用されている。

これと同じか、あるいは非常に類似した崇敬が、ラーマーヤナで *pūjā* と呼ばれている。[1.14.27] *ācchādītās te (yūpāḥ) vāsobhiḥ puṣpair gandhaiś ca pūjitāḥ*。

しかも、黒魔術において同じ名前 (*pūjā*) に会いさえする。ある種の魔術においては、21個の小石を積み上げ、蜂蜜とギー [水分を蒸発させて精製したバター脂肪] を (火のなかへ) 注ぎ、そしてその小石を芳香と花環で「崇敬」し、埋めるべし、とあるのである。[Kauṣ.14.3.56(261.21f.)] *tato gandhamālyena pūjayitvā nikhānayet*。 *pūjā* の本来的形式の原初の特徴というものももしどこかに存在するとすれば、それはまさにここに現われているのではないか。しかしここで小石に対して為されていることは、実に不適切で、明らかに濫用である。実際になぜそのような行為に至ったのか、それを的確に説明しているのが、[AV.10.6.4] *hiranyasrag ayaṃ maṇiḥ ... gr̥he vasatu no'tithiḥ* (この魔除け石が、黄金の環で飾られ、…客人としてわれらの家に留まらんことを) の一文である。

以上の論述のなかで引いた資料に基づき、暫定的に√*pūj*の「根源」として挙げうるものを、次のように提示することができよう。

1. [客人または到着者を] 客にふさわしい歓待 (挨拶、牀座の提供、洗足、沐浴、荘厳、疲れを取る飲食物の提供) によって崇敬すること、深い敬意をもって迎え、饗応すること。
2. [神を] 客人として (到着する客人に対して通常行われている形式のもとに) 崇敬すること。
3. [神的存在として崇敬される対象：武器、供犠用具、または魔術の道具なども] 花や芳香、荘厳などによって (あたかも神がみに対するかのように) 崇敬すること。

最初の項目については、「崇敬すること」の一般的な意味を付け加えなけれ

ばなるまい。それは例えば、[Pāṇ.2.1.61]⁽⁵⁾ sanmahatparamottamotkrṣṭāḥ pūjyamānaiḥ の前に置かれており sat, mahat parama, uttama, utkrṣṭa などの語は、崇敬される〔諸概念のための語〕と組み合わせられている。つまり崇敬される王が mahārāja などと呼ばれるのである。[Nir.3.18] siṃho vyāghra itī pūjāyāṃ śvā kāka itī kutsāyāṃ (崇敬が〔意図されている〕とき、彼は獅子である。彼は虎である〔とひとは言う])。一方、誹謗の場合には、彼は犬である、彼は鳥である、となる。[12.7] ekasyā eva pūjanārthe bahuvacanam syāt (単数形 [Uṣas] の複数形 [RV.1.92.1a] の uṣasaḥ は、〔それを〕崇敬するために用いられた可能性がある。[Rām.1.69.11] ... diṣṭyā me pūjitaṃ kulam, Rāghavaiḥ saha sambandhāt (〔幸運な〕撰理によって、Rāgha の子孫との姻戚関係に基づき、わが家は崇められている)。[3.9.27] deśadharmas tu pūjyatām (この国の徳が守られんことを)。

叙事詩的テキスト一例としてラーマヤナの最初の三章 (kāṇḍa) をとった一を、√pūj の使用法という観点から通覧するとき、1 の用例が他を凌駕して最も多いことが直ちにわかる。1 と 2 の意味における用法と、単なる「崇める」とのあいだにも、またその周辺にもいくつかの用法が存在するし、必ずしも「滞在する」というたぐいの意味での用法がそこから除外されはしないのである。

客人と神性ととの次に pūjā の対象となるのは、とりわけ婆羅門である。[Rām.2.109.31] ...dvi-jāṭidevatātithipūjanam ca panthānam āhus tridivasya santaḥ. 第一に、特別な崇敬を受ける客人であるかぎりはそうである。(3.46.33) dvi-jāṭiveṣeṇa hi taṃ dṛṣṭvā Rāvaṇam āgatam sarvair atithisatkārāiḥ pūjāyāṃ āsa Maithilī (cf. [3.47.2] brāhmaṇas cātithis caiva anukto hi śapeta mām, itī dhyātvā ... Sītā vacanam abravīt). 次に、彼が典型的な客人である場合、例えば供養のために招かれた祭官 (Rtvij) (例えば [Rām.1.8.7]) として、あるいは請願する賢人 (muni) (例えば [1.18.55]) とした場合が挙げられる。そのようなものとしての客人は、まさに pūjārha ([1.52.17], [1.53.8]), または pūjya ([3.8.5], [2.24.29]) と呼ばれる。

しかし、神性への pūjā の場合には、莊嚴を施すことや食事や飲み物を提供することが本質的特徴として感じられており、それは当然ながらすぐさま一つの祭儀へと発展する。それが実施された時には、もはや饗応の観念は色あせていくのである。同じように、婆羅門への pūjā の場合は、崇敬が本質的特徴となる。例えば、婆羅門の到着の際に座席から立ち上がること ([Rām.2.5.24]),あるいは礼儀正しく別れの言葉を述べること (例えば [1.26.32]),あるいはまた婆羅門にうやうやしく対応することそれ自体に、そうした崇敬の表現が見て取れる。ラーマは, brāhmaṇo 'sīti pūjyo me ([Rām.1.76.6]) と釈明して, Rāma Bhārgava に対して死の矢を放つことを拒むのである。

敬意を示すこと、特に敬意に満ちた挨拶をすることは、尊敬するに足るすべての人 (guru) に対しての義務である。[Rām.2.31.16] dharmajñja gurupūjāyām dharmās cāpy atulo mahān, つまり父に対して, [1.77.21] pitaram devasaṃkāsaṃ pūjayām āsatus (畏敬に満ちた挨拶をした) tadā, 母に対して, [2.21.25] yathaiva rājā pūjyas (敬意を示されるべき) te gauraveṇa tathā hy aham⁽⁷⁾ (母), 年老いた人びとに対して, [2.1.14f.] vṛddhānām pratipūjakaḥ (敬意を示しつつ)...sānukrośo jītakrodho brāhmaṇapratipūjakaḥ, [2.20.9] so 'paśyat puruṣaṃ tatra vṛddhaṃ paramapūjitam (極めて敬われ), upaviṣṭaṃ grhadvāri 一とりわけ, 父の友人である場合には, [3.14.4] sa taṃ pitṛsakhaṃ matvā pūjayām āsa (畏敬の念を以て迎えられ) Rāghavaḥ 一,あるいは, 王侯の父より伝わる顧問官たちに対して, [2.101.13] tad idaṃ śāśvataṃ pitryaṃ sarvaṃ sacivamaṇḍalaṃ, pūjitam (崇められ, 敬意を受けるにふさわしい) puruṣavyāghra nātikramitum arhasi. そして一ある意味では二重の理由で一族の upādhyāya (親教師) に対しては, [2.100.9] sa kaccid brāhmaṇo vidvān dharmanityo mahādyutiḥ, Ikṣvākūṇam upādhyāyo yathāvat tāta pūjyate (畏敬の念をもって対応する) のであろうか。

妻は夫を崇める。[Rām.2.39.30] ...bhartāraṃ kā na pūjayet. 彼女は、彼に軽蔑を示してはならない。なぜなら夫は妻の神性だからである。[2.39.31] ...ārye kim avamaneyyaṃ striyā bhartā hi daivatam. この独特の考え方には、夫

への pūjā における、ある種の祭儀上の特徴が観察される。花嫁が夫の足の親指に赤い色を塗布するのをもまた、この事柄に属する（シャルバンティエ、同、p. 289）。

[Āśv.G.S.1.24.1ff.] によれば、崇敬をもって歓待すべき対象がある。それはすなわち、供犠を営むために招いた聖職者たち（1）、学問研鑽を終え（snātaka）、[願いごとをもって] 近づいてきた婆羅門（2）、教師（⁽⁸⁾ācārya）、義理の父、父ないし母の兄弟（4）、そして王に対して（3）である。最後の項目に関しては、[Rām.1.52.14] satkriyāṃ hi bhavān etāṃ pratīcchatu mayā kṛtām, rājams tvam atithīśreṣṭhaḥ pūjanīyaḥ prayatnataḥ を参照されたい。この方向性においては、王は、pūjya [Rām.3.40.14] または pūjanīya [3.1.19] である婆羅門とひとしく、「尊ばれるべき者」そのものとなる。

しかし、崇敬のモチーフは少々異なる。たしかに王はそれ自身「崇めるにふさわしい」（guru）ものであるが、しかし人びとから畏れられるのは、婆羅門の場合のような（[Rām.3.47.2]）呪いではなくて、王が告げる罰ゆえである。王が崇められるのは、神聖な力をもっているからではなく、王が権力者であり、公正で、慈悲深いがゆえである。[Rām.3.1.18f.] dharmapālo janasyāsya śaraṇyaś ca mahāyāsāḥ, pūjanīyaś ca mānyaś ca rājā daṇḍadharo guruḥ, [3.40.13f.] auṣṇyaṃ tathā vikramaṃ ca saumyaṃ daṇḍaṃ prasannatām, dhārayanti mahātmāno rājānaḥ ... tasmāt sarvāsv avasthāsu mānyāḥ pūjyāś ca nityadā. 怒りと慈悲を正しく分け与える王の公正さは、まさに、彼が「崇められ、尊敬される」ための条件となっている。[3.33.21] nayanābhyāṃ prasupto vā jāgarti nayacakṣuṣā, vyaktakrodhprasādaś ca sa rājā pūjyate janaiḥ, [Kauṭ.1.4.13(6.5)] yathārhadāṇḍaḥ pūjyaḥ.

神がみに対し崇敬として行われる pūjā は、神がみの住まいに向けられることもある。[Rām.1.77.12f.] maṅgalālāpanair homaiḥ śobhitāḥ kṣaumavāsasaḥ, devatāyatanāny āśu sarvās tāḥ pratyapūjayan. そして苦行者に対し敬意として示される pūjā は、彼らの庵に向けられる。[1.48.15] āśramo divyasamkāśaḥ surair api supūjitāḥ [Kauṭ.13.5.14(252.16)] sarvadevatāśramapūjanaṃ ca ...

(9) kārayet. 神的な存在は、そこに在ることによってすでにその場所を「崇められる」場所とする。だとすれば、[Rām.3.1.4] [tāpasāśramamaṇḍalam] pūjitaṃ copanṛttaṃ ca nityaṃ apsarasāṃ gaṇaiḥ については、次のように訳するのが最も適切であろう。「つねに榮譽に浴し、天女の群によって舞踏の場所として用いられる、いくつもの森の庵」と。mantriṇo mantrapūjitaḥ ([Rām.2.113.2]) という表現における形容詞 mantrapūjita は、註釈者の説明によれば、「困難な懸案を考量する際の決断者として崇められる」という意味である。私の考えではそれはあまり説得力をもたず、せめてむしろ「(神的存在としてイメージされた) mantra により (それが姿を現すことによって) 榮譽を与えられた、mantra の通曉者 (Vasiṣṭha, Vāmadeva, Jābāli が念頭に置かれている)」という意味を考慮に入れたい。

崇められる人を莊嚴するということが、客人を讃えること、ひいては讃えることそれ自体に属する事柄なのだとなれば、「莊嚴する」と言うべき場所で、時には「讃える」の語を用いることがあるかもしれない。[Rām.2.3.13] antaḥpurasya dvārāṇi sarvasya nagarasya ca candanasragbhir arcyantām (着飾るべきこと) dhūpaiḥ ca ghrāṇahāribhiḥ. そうであるからこそ、そして例えば「色を塗りつける」などの意味が元来存在したからではなく、√pūj は、[2.26.16] ...hastī ... śrīmān sarvalakṣaṇapūjitaḥ というふうに使われるのである。

全く一般的な言い方をすれば、崇敬とは来訪者を満足させるものである。人は来訪者の望みを満たそうと努める。[Rām.2.70.6] dūtān uvāca Bharataḥ kāmāiḥ sampratipūjya tān, [1.77.9f.] praviveśa gr̥haṃ rājā ..., nananda svajanai rājā gr̥he kāmāiḥ supūjitaḥ (cf. [2.84.18] āśaṃse svāsītā senā vatsyatya enām vibhāvarīm, arcito vividhaiḥ kāmāiḥ śvaḥ sasainyo gamiṣyasi). かくして客人は喜びを得る。[1.69.18] uvāsa paramaprīto Janakenābhipūjitaḥ.

ここから、「ある人を〔望みをかなえることで〕満足させる、喜ばせる」という意味へと展開するにはほんのわずかな一歩でよい。[Kauṭ.9.3.37(210.23)] ... pratipannam (同意した人を) iṣṭābhiprāyaiḥ pūjayet, [1.13.15f.(15.12)]

tuṣṭān bhūyaḥ ⁽¹⁰⁾pūjayet . atuṣṭān ... prasādayet, ⁽¹¹⁾[Rām.2.18.22] eṣa mahyaṃ varam dattvā purā mām abhipūjya ca, sa paścāt tapyate rājā, [1.24.22ff.] tato deśasya supṛīto varam prādād anuttamam ... deśasya pūjām tām dr̥ṣṭvā kṛtām śakreṇa ... [Pāṇ.4.1.163] に対する [Vārtt.3] vṛddhasya ca pūjāyām (pūjā [を望む] なら, [術語としての yuvan が] 老人にも [与えられる] ということが [教えられているべきであった]) の箇所について, Patanjali (p. 265 1.24) は, kā punar iha pūjā (しかしここで pūjā とは何の意であるのか) という問いを立て, 次のように答えている。yuvatvaṃ loka īpsitaṃ pūjety upacaryate. tatrabhavanto yuvatvenopacaryamāṇāḥ prītā bhavanti (pūjā (満足を与える, 喜ばせる) として, [汝は] 若いと告げられることが, 人びとのあいだで望ましいことと見なされている。栄誉にふさわしい人びとは, 若者 (yuvan という名をもつ者) として扱われるとき喜びを味わう)。Yāska が, [RV.4.57.2d] ṛtasya naḥ patayo mṛḷayantu に対する注釈 [Nir.10.16] で, mṛḷayatir upadayākarmā pūjākarmā vā (動詞 mṛḷayati の行為は「同情」あるいは“pūjā”を表現する) と述べる時, 意味の第二の可能性として, mṛḷayantu=pūjayantu= [[われわれの望みをかなえることで] 喜ばせてもらいたい] という図式になる, ということを理解しなければならない。

[[愛すべき神 ([Rām.1.73.6f.], [3.12.30] など), 友人 ([1.11.16f.])⁽¹²⁾] を客人として敬い, 歓待する] という意味からは, 「歓迎すべき, 望まれる」という意味での abhipūjita の用法を導くことができる。[Rām.1.52.22] yasya yasya yathākāmaṃ ṣaḍ raseṣv abhipūjitaṃ tat sarvam ... abhivarṣa (六種の味覚のうち, それぞれの人の望みに応じて歓迎されるもの, そのすべてが降り注ぐことを...)⁽¹³⁾

PW. は, pūjā に関しては, 客人として歓待することへの関係を特に強調してはいないが, pūjayati に関しては「畏敬の念を示す, 敬う, 尊敬の念をもって対する, 敬意をもって迎える」といった意味を記している。それに対して反論できるとしても, 最後に挙げられた意味が最初に言われるべきだ, という程度のことであろう。同様に, 「歓迎する」は, prati + pūjayati の第一義であ

るべきである。abhi + pūjayati を「ひとを敬意にあふれつつ迎える、——歓迎する、敬う、称揚する」とする記述については異論の余地はない。いずれにしても、pūjā とは、元来「客人に敬意を示すこと」であり、そしてこの点からその他の用法も容易に理解できることについては、上述の論証から十分な蓋然性をもたせることができたと信じる。たいていの場合は、理論的に展開させる必要はなく、主要な意味と副次的意味とのあいだの中間段階を、つまり狭義の用法からより自由なそれへの移行を、テキストの陳述それ自体から読み取ることができるのである。

ただし、「客人に敬意を示す」という意味が「敬う」という意味よりも古い、という点についての充分に説得力ある証明は、「客人に敬意を示す」という意味での pūjā について、それを確証する語源が発見されたとき、つまり W・シュルツェがかつて語源学者の使命として記した、「言葉を生み出した印象をもう一度生き生きと蘇らせること」(『小論集』 p. 117) に成功したときにこそ、ようやく提示しうるのである。

「pūjā に関してアーリア的起源を考えることができない」(同, p. 284) シャルパンティエとは異なり、私はそれを極めて可能性が高いと考えている。この概念は「非アーリア的なもの」をまったく含んでおらず、それ自身が属する言語で表現できないようなものを何一つ含んでいないのである。むしろ逆に、[Rām.1.10.15] kariṣye ...pūjām ... vidhipūrvakam (規範が遵守されるように), [1.13.2] nyāyataḥ (規則にしたがって) pratipūjya, [1.49.22] pūjām ... vidhivat (規範が示すとおり) prāpya (cf. [3.35.39] sa ... samāgamyā vidhivat tena ... arcitaḥ, [3.74.7] pādyam ācamanīyaṃ ca sarvaṃ prādād yathāvidhi), [2.56.17] ... pūjayām āsa dharmavit (dharma に通曉するものとして), [1.50.7f] ... arghyam ādāya satvaram ... Viśvāmitrāya dharmeṇa dadau dharmapuraskṛtam, pratigṛhya tu tām pūjām, のような表現は、pūjā が婆羅門の慣習における規範を充足するものとして捉えられていたことを、すでにそれだけで実に明確に示しているのである。

この論証の正当性はまた明らかであった。何か実例を挙げるとすれば、すでに引いた章句 [Āśv.G.S.1.24.1ff.] で、客人の出迎えに関して比較的厳密な規範を述べている。この歓待が向けられるべき人びとに関する記述も (同, p. 116 参照), またその歓待の個々の要素に関する記述も ([Āśv.G.S.1.24.7] viṣṭara, pādya, arghya, ācamanīya, madhuparka, go), pūjā について確認しうる事柄と見事に一致する。

G.S. の一節はこう始まる。rtvijo vṛtvā madhuparkam āharet (供儀の祭司を選んだなら、その人びとに蜂蜜の混合物を差し出すべし)。事実、蜂蜜の混合物を提供することは、その行為が今一度言及される [1.24.7ff.] の箇所で強調されるように、順序として最優先されてはいない。それは牀座の提供と洗拭に続いて行われる。しかし明らかに、この行為はとりわけ特徴的なものとして感じられており、それゆえにこそいわば見出しのなかで言及されるのである。

[Āśv.G.S.1.24.1] ...madhuparkam āharet という箇所は、まさに次のように書き換えることができるだろう。すなわち [[上述の7つの部分から成る] 客人への敬意を示されたし]。つまり pūjām kuryāt, またはより正確に, pūjām upāharet と (cf. [Rām.1.51.5] upāharat pūjām)。

蜂蜜入り飲料の提供は、「客人として歓迎する」という意味の pūjā が創造されるに当たって、「言葉を生み出す際の印象」としての役割を担ってはいなかっただろうか。そして pūjā は、-parka と同じ語根に帰せられるのではないか。

parka は、 $\sqrt{\text{pṛc}}$ 「混ぜる」に属し、RV. では現在形 pṛṅakti, 複数形 pṛṅcati, ĀV. では主題的にも *pṛṅcati (命令形 pṛṅca [AV.9.4.23], 現在分詞 pṛṅcati [18.4.50]) を形成している。

[Pāṇ.3.1.35ff.] に記された語形中、-aya による現在形の語幹、現在完了、反射態現在、そしていくつかの「語根」について、janayām akar 型 (Schwarzer YV のみ、また拙論「パーニニとヴェーダ (Pāṇini and the Veda)」p. 15)、また、cakāra, vidāṃ kurvantu, bibhayāṃ cakāra, bibharāṃ cakāra, kāsāṃ cakre などの型の婉曲的形式を形成しているのと同様に、現在形の語幹 pṛṅca- についても、*pṛṅcām akar, pṛṅcām karotu, *pṛṅcām cakāra, cakre のような形式を、

可能性として仮定できる。しかし、*pr̥ncām については、ここで前提とした母音間での ñc の発生が、たとえわれわれの知る方言には存在しないとしても、民衆の言語のなかで、*puñcām, *puñjām, *pujjām といった中間段階から pūjām になったのだということは想定して差し支えないと思われる。いずれにせよ、この小さな困難は、極めて高い確率で、単に古代の様々な方言に対するわれわれの無知から生じているのであり、それがここでの深刻な障害とみなされるとは考えられない。

ここで述べた推測に対して、pūjā は実にしばしば \sqrt{kr} の目的語として現われるという事実が見事に当てはまる。起源的に婉曲的な言い方である pūjām \sqrt{kr} ([人のために] 混ぜ物を作る) から、後に名詞 pūjā 「客人に敬意を示すこと」が抽出され、それに加えて、名詞由来動詞 pūjayati 「歓迎する、敬う」が、そしてさらに pūjana (パーニニでは常に形容詞) が造られたのである。

形式上の類似を示しているのが、cintā とその名動詞 cintayati である。というのも、cintā は、pūjā が *pr̥ncām \sqrt{kr} に帰せられるのと同様に、cintām \sqrt{kr} に起源をもっているはずだからである。ただしこれ自体は、*pr̥ncām \sqrt{kr} が pr̥ncati に基づいているのと同様に、現在形 *cintati に基づいており、それはたしかに現存していないのだが、aw. cinat- (接続法 činaθāmaide [Vr.12,4] によって証明される。かなりしばしば起こるように、t が誤って θ となっている) から解明しうる。つまり、例えばヴェーダの vindati とアヴェスターの vinad が対応するように、*cintati とアヴェスターの cinat- が対応するのである (vīnastī Y.31.15 など)。

また pūjā という語が、民衆語の音成態を示していることも完全に予想通りである。客人を迎えるのは、婆羅門ではなく、家の主人ないしは女主人 (例えば [Rām.1.51.5]) であり、また天上人に pūjā を示すのは、婆羅門のみではなく、女性も含めた信者一般 (例えば [Rām.2.20.14], [19.1.77.12f.], [2.24.28f.]) である。そして、高次の祭儀の神性だけではなく、まさに低次の祭儀における神性もまた pūjā を受け取るのである (同上 p. 111ff)。

こうして、荘重な yajña——そのますます複雑化していく実践は、困難な学

業の修了を義務づけられた聖なる人びとに委ねられることになる——と、他方、最も簡素な場合には一掴みの花束と皿に一杯の水で事足りる pūjā とは、冒頭で言及した St.Konow の見解とは異なり、一つの同じ基礎の上に立つものなのである。つまり招かれた神性を歓待するという思想に基づくものなのである。例えば [AV.9.6] において、客を歓迎する個々の段階が、供犠のそれと神秘的に等置されるとき、例えば、[Manu.3.70] において、nryajño 'tithipūjanam (客への敬いとは、人間に捧げる供物である)と言われるときには、根本的には、yajña と pūjā の元来の意味によって実際に与えられている関連性が人工的かつ不完全に再現されているに過ぎないのである。特筆すべきことに、この元来の意味は、聖職者的思考の呪縛に完全に陥っていく yajña においては、いち早く決定的に背後に退いていき、神秘的な力によって惹き起された魔術的行為としての供犠という考え方に場所を譲っていくのである。そしてその一方で、今日の pūjā の形式は、本来の内容を実に明白に伝え続けているのである。

註

- (1) 沐浴用の水としては、とりわけ祭儀的な機会には、芳香をもつ物質を加えるのが常であった。例えば、[Rām.2.65.8] haricandanasampṛktaṃ udakaṃ kāñcanairghataiḥ, āninyuḥ snānaśikṣājñāḥ... を参照のこと。
- (2) これは、āyāgabdhūta の意であろう。注釈も同様である：yajaniyadevatābhūtaṃ ity arthaḥ. PW. が āyāga のものとして提示する「供犠の贈り物」という意味はおよそ不可能であろう。
- (3) [Ait.Br.2.2.4] によれば、溶かしたバター (ājya) とともに。
- (4) 若さ、すなわち若い外観は、おそらく軟膏を塗った結果である。例えば、[RV.10.85.43] ājarasāya sam anaktv aryamā (君(花嫁)が、年をとらずに(つまり若く)あるように、aryaman が君に軟膏を塗らたもうことを)を参照のこと。拙論「リグヴェーダにおける異人(Fremdling im Ṛgveda)」p.125を参照せよ。
- (5) [2.1.62] とともに、これはパーニニにおける√pūj の意味の最も重要な箇所である。
- (6) 1の意味を、[Nir.5.14] udakaṃ puṣkaraṃ pūjākaram ... (puṣkara とは水である：彼は pūjā (水を用いた挨拶)を遂行する……(したがって puṣ は、pūjā に等しいものとしてある))に認めることができる。
- (7) cf. [Rām.2.101.21] yāvat pitari dharmajña gauravaṃ lokasatkṛte, tāvad dharmakṛtām śreṣṭha jananyām api gauravam.
- (8) [Kauṣ.5.3.20(145.23)] ...ācāryā vidyāvantaś ca pūjāvetanāni (報酬としての崇敬

の贈り物) yathārhaṃ labheran いわば [Āśv.G.S.1.24.2] と [4] の軌範の拡張である。

- (9) [Rām.1.48.10] tāṃ dṛṣṭvā munayaḥ sarve Janakasya puriṃ śubhām, sādhu sādhu iti śamsanto Mithilām samapūjayan において言われているのは、賛意としての歓迎であって敬意によるものではない。これに関しては、[1.8.10] tataḥ sādhu iti tad vākyam brāhmaṇāḥ pratyapūjayan (賛意を示して歓迎した、賞讃した), [1.12.20], [2.76.12], [3.20.5] など、それから [1.26.27] sādhu sādhu iti Kākutstham surāś cāpy abhipūjayan (賛意を示して歓迎した、祝福した), [1.34.19], [1.49.20], [3.26.16] などの箇所を参照のこと。[Pāṇini 1.4.94] suḥ pūjāyām では、おそらく「もし賞讃が〔表明されているなら〕 su 〔とは一つの karmapravacānīya である〕」と言われている。それに従って、[Nir.3.21] astir abhipūjitaḥ svastīti (誉められたる息子は、svasti 〔と呼ばれる〕)。——地理上の概念が、「崇める」という一般的な意味での√pūj の対象となると単純には見なせないことは、[Patañjali I, p. 105, 1.8f.] が教えている。…Gālavagrahaṇam tasya pūjārtham deśagrahaṇam ca kīrtiyartham (…その者のために、その者を崇めるために Gālava (Pāṇ の名が挙げられる。そして土地 ([4.1.160]) を褒め称えるために、その名が挙げられる)。
- (10) Shama Sastry, 第2版, p. 23, 1.12. M. とともに Jolly は、bhūyaḥ ではなく arthamānābhyām という読み方を採っている。私としては上掲の方を、いくぶん難解ではあるが、もし正しく理解しているとすれば、より特徴的な読みとして優位におきたいところである(「満足した人びとをさらに満足させるべし」と)。Jolly が挙げたものは [Kauṭ.1.11.29 (13.1)] に基づくものと思われる。
- (11) pūjayet-prasādayet の対応を、[Rām.2.25.20] nṛmāṃsabhojanā raudrā ye cānye sarvajātiyāḥ, mā ca tvām hīmsiṣuḥ putra mayā sampūjītās tv iha の箇所の解明に用いるむきもあるかもしれない。たしかに理解不能ではないとはいえ、そのような偶発的な思考からは、pūjā がそもそも元来は魔除けの性格をもっていたことを帰結するには至らない。
- (12) cf. [Pār.G.S.1.3.1] ṣaḍ arghyā bhavanti: ācāryaḥ ... priyaḥ ... iti.
- (13) 分詞の現在的意味と属格を用いた構造は、[Pān.3.2.188] (vartamāne 123 kṭaḥ 187) matibuddhi pūjārthebhyāḥ と [2.3.67] (ṣaṣṭhī 50 kartṛkarmaṇoḥ 65) kṭasya ca vartamāne の用法と一致する。

* 本稿は、Paul Thieme: Indische Wörter und Sitten. 1. *pūjā*. 2. *satkr*. 3. Pāli *paññākāra*. 4. *maṇḍate*, *piṇḍa*, *paṇḍita* usw. ZDMG 93. 1939, S. 105-137. の中から、1. *pūjā*. の部分のみの翻訳である。なお原文で表示されているヴェーディックのアクセント記号は、本誌の読者には却って煩雑になるであろうとの判断から省略している。